平成２９年度鹿児島市総合教育会議　議事録

□開催年月日　平成３０年２月８日（木）　１１時　開会
１２時　閉会

□開催の場所　鹿児島市役所　本館２階特別会議室

□出席者

市長	森　博幸
教育長	杉元　羊一
教育委員	津曲　貞利
教育委員	髙島　まり子
教育委員	桃木野　聡
教育委員	立元　千帆
（関係者）	
尚古集成館　館長	松尾　千歳
（関係職員）	
企画財政局長	鉾之原　誠
企画財政局企画部長	原　亮司
市民局市民文化部文化振興課長	新小田　洋子
教育委員会管理部長	緒方　康久
教育委員会教育部長	中﨑　新一郎
教育委員会教育部学校教育課長	谷口　幸一郎
教育委員会教育部青少年課長	山下　敦宏
教育委員会教育部生涯学習課長	吉松　健二
教育委員会教育部少年自然の家所長	永吉　眞一
（事務局）	
企画財政局企画部参事（政策企画課長）	有村　浩明
企画財政局企画部政策企画課主幹	室田　久敏
企画財政局企画部政策企画課主査	川畑　寿一朗
教育委員会管理部参事（総務課長）	橋口　訓彦
教育委員会管理部総務課主幹	堀田　竜也
教育委員会管理部総務課主査	久家　加奈子

□次第

１．開会

２．議題

明治維新１５０周年の節目を迎えての郷土教育に関する取組について

３．閉会

□会議要旨

１．開会

（政策企画課主幹）

それでは定刻でございますので、ただいまから、平成２９年度鹿児島市総合教育会議を開会いたします。

早速ですが、会の進行を本会議の招集者でございます森市長にお願いいたします。

２．議題

明治維新１５０周年の節目を迎えての郷土教育に関する取組について

（森市長）

それでは、皆さまおはようございます。よろしくお願いいたします。

それでは今回は「明治維新１５０周年の節目を迎えての郷土教育に関する取組について」という議題を設定いたしました。

まず、この議題の趣旨等について、事務局より説明をお願いします。

（政策企画課長）

本日の議題についてでございますが、今年は明治維新１５０周年という大きな節目にあたり、また、大河ドラマ「西郷どん」の放送も始まりましたことから、明治維新をはじめ本市の個性あふれる歴史や文化に注目が集まる年になるものと考えております。

また、地方創生との関連におきましても、若者の人口流出が課題となっております中で、この明治維新１５０周年という大きな節目を契機としまして、市民の皆さまや青少年が、あらためて郷土の歴史や文化に関する理解や関心を深めていただき、郷土に対する誇りと愛着心を醸成することが、本市の発展・活力の維持向上にも資するものと考えておりまして、本日のこの議題を設定したところでございます。以上でございます。

（森市長）

今、説明がありましたような理由等で本日の議題を設定したところでございます。

その中で、本日は、尚古集成館館長の松尾千歳さんに、特別にご参加いただいております。ありがとうございます。

後程、ご意見をいただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、郷土教育に関する市の取組について、資料に基づいて、教育委員会と文化振興課からの説明をお願いします。

（教育委員会管理部総務課長）

教育委員会の取組についてご説明を申し上げます。資料１をご覧ください。

まず教育大綱における郷土教育の位置づけでございます。基本方針（６）で「生まれ育った本市の風土を愛し、地域に貢献したいという郷土に対する愛着心を育む」と定め、小学校

から高等学校までの各ステージにおいて、郷土の歴史や偉人等を学ぶことを通じた郷土の理解を深める取組や体験活動等を進めるほか、地元企業等と連携したキャリア教育、国内外との交流や地域の様々な人々との交流、まちづくりについて意見交換を行う取組等を進めることとしております。

次に１の学校教育における郷土の歴史や偉人等を学ぶ機会といたしまして、（１）の教科における学習では、社会の副読本の活用などの取組がございます。また、（２）の総合的な学習の時間や学校行事等を活用した郷土教育では、①郷土の伝統的な芸能の継承など、体験的な郷土教育の実施、②地域の人材や郷土出身者等の講師招へい、③マンガ教材の活用、④近代化産業遺産出前授業、⑤新・郷中教育推進事業として「放課後子ども教室」の取組がございます。

(３)の国内交流教育等を通じた郷土教育では、①の山形県鶴岡市、岐阜県大垣市、岐阜県養老町との交流を通して西郷隆盛や薩摩義士の偉業を学ぶ取組や、②の明治維新１５０周年を記念した萩市との小学生の交流事業、③次世代を切り拓く青少年育成事業として「かごしま創志塾」の実施がございます。

(４)のその他の取組では、民間の取組を応援する形で、①西郷どんの遠行の後援、②「かごしまジュニア検定」受検の推奨、③西郷どん大河ドラマ館の招待券の県内全児童・生徒への配付協力の取組がございます。

次に、２の生涯教育における郷土の歴史や偉人等を学ぶ機会では、(１)の生涯学習プラザや地域公民館での各種講座の開催のほか、(２)の西郷南洲顕彰館の運営を通した、西郷南洲翁ほか郷土の先覚者たちの偉業を伝える取り組みを行っております。教育委員会の説明は以上でございます。

（森市長）

それでは文化振興課お願いします。

（文化振興課長）

それでは、市民局の取組についてご説明いたします。お手元の資料２をお願いいたします。大きく２つの取組を行っておりますので、順にご説明いたします。

文化薫る地域の魅力づくりプランに基づく取組でございます。

(１)取組の目的、概要ですが、本市では平成２４年度に、真に豊かさを実感できる都市の実現に向けて、文化振興を通じた元気な地域づくり・人づくりを進めるため、文化薫る地域の魅力づくりプランを策定いたしました。現在もこのプランに基づき、本市にゆかりの深い美術、音楽、地域伝統芸能などを含め、さまざまな文化資源を生かしたイベント等を市民協働で行っております。これらの取組の中で、(２）郷土の文化の理解等につながる取組といたしまして、音とあかりの散歩道など①から③に挙げておりますイベントにおいて、地域伝統芸能等を披露し紹介しております。このような取組が、郷土の文化に対する理解を深めたり、郷土への誇りや愛着の醸成にもつながるものと考えております。

また、④ですが、平成２７年度には、本市に数多く伝承されている地域伝統芸能をわかりやすく紹介する映像を作成いたしまして、庁舎等の市民ロビー、市内の金融機関、ホテル等に配付し活用していただいているほか、この紹介映像につきましては、小・中・高等学校のＫＥＩネットで自由に閲覧可能となっております。

次に、今年度から開始いたしました、「ふれてみよう！かごんま弁事業」でございます。事業の目的は、児童生徒がかごしま弁に触れることで、かごしま弁に対する興味、関心を喚起するとともに、その普及・継承に取り組む文化団体の活動の促進を図ることでございます。核家族化などにより、日常で鹿児島弁に触れることや、話す機会が少なくなっております。鹿児島弁が地域に伝わる貴重な文化であることから、継承していくことに加え、継承活動を行っている文化団体への支援が必要であることから、継承に向けた取組の一つとして実施に至ったものでございます。この取組もまた、市民の郷土に対する愛着や誇りの醸成にもつながるものであると考えております。

事業の対象は、小学校５年生から中学校３年生までで、授業の１コマを使い、かごしま弁を使った演劇、朗読、講話などを実施いたします。本年度は小学校４校、中学校４校の計８校で実施し、児童生徒からは、「かごしま弁に興味を持った」などの感想が聞かれ、鹿児島弁に対する興味・関心につながったものと考えております。

お手元に配付しました小冊子は、理解を深めていただくため、実施の際に児童生徒に配付している資料でございます。以上、これらをはじめとする文化振興の取組が市民生活に潤いをもたらすとともに、地域の活性化や本市で暮らすことへの誇りや満足感を高めることにつながっていくものと考えております。以上でございます。

（森市長）

ありがとうございました。それでは、続けて、先ほどご紹介いたしました、尚古集成館松尾館長さんのご紹介を、事務局からお願いします。

（政策企画課長）

それでは、松尾様のご紹介をさせていただきます。松尾様は、福岡県のご出身で、鹿児島大学をご卒業後、尚古集成館に入られまして、現在は館長をお務めでございます。

鹿児島の歴史研究の第一人者としてのご活躍はもとより、鹿児島大学や鹿児島国際大学におきまして、非常勤講師として、鹿児島の歴史に関する講義を担当されるなど、教育、観光等の多方面でご活躍中でございます。

（森市長）

それでは、松尾館長さんから、ご自身の経験等も踏まえ、郷土教育について、ご意見を伺いたいと思いますので、よろしくお願いします。

（松尾氏）

尚古集成館の松尾でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

先ほどご紹介いただきましたように、鹿児島大学と鹿児島国際大学で、非常勤として鹿児島の歴史を教えているわけですが、講義のとき、学生たちに一番最初にお話しさせていただくのは、なぜ歴史・文化を学ぶのかということです。年号とか人の名前を覚えるのが歴史ではないと思っております。私は、人と人、地域と地域の交流と申しますのは、その人・地域の持つ歴史・文化の衝突だと思っています。自分たちのことをしっかりと理解していなければ、相手に飲み込まれて流されてしまう。そうならないためには、自分たちの歴史・文化をしっかりと学びましょうということを、まず学生たちに伝えております。

まずそのように言うのは、鹿児島の人々を見ていて、自分たちの歴史・文化を見失っているのではないかとの思いが強くなっているからであります。

ご紹介いただいたように、私は福岡生まれの福岡育ちで、鹿児島と縁もゆかりもない者でした。ただ小さい頃から歴史に興味を持っていると、鹿児島の地は輝く、あこがれの地でした。

鹿児島にやってきて、４年間だけのつもりで鹿児島大学に入りましたが、縁あって今の職場に勤めることになり、鹿児島の歴史・文化を研究するようになっていたわけですが、やればやるほど、自分が誤解していた、そして多くの人が誤解しているという思いが強くなっています。

例えば、最初に思っていたのは、「鹿児島は日本の隅っこにある辺境の地」、「文化や技術は中央で生まれて地方に広がっていき、遠く離れた鹿児島は最後に伝わってくるような遅れたところ」というようなイメージを持っていました。

また、武の国のイメージが強く、文化や技術は顧みておらず、レベルが低いというように思っていました。

しかし、文化財に接しているとこれが誤解だと思い知らされました。鹿児島は日本の辺境に位置しているが、それは同時に外国に接していることでもある。外国の窓口だった。非常に外国との交流が盛んなところで、異国情緒あふれる文化を育んで、文化・技術のレベルが高かったということがわかりました。歴史を研究すればするほど、自分が誤解していたという思いが強くなっています。

そういったことが、ほとんど知られていないので、子どもたちと話をしても「何もない鹿児島」というような考えをもっている子が多い。そうではないということをしっかりと教えていくべきだと考えており、今年はその好機ではないかと思っています。

大河ドラマにも少し関わっているのですが、大河ドラマで、西郷隆盛は一度「翔ぶが如く」で取り上げられています。ですから、制作側では、同じようなストーリーではつまらないということと、幕末維新の調査・研究が進んで、従来の視点と違う、幕府を倒すのが目的ではない明治維新ということが注目を浴びている状況ですので、そういったことも反映させたいということで、ドラマに取り組んでいるそうです。それで相談に来られました。

また、何かネタを提供してほしいということで私どもが提供したものが、第１回目から使われました。例えば第１回目に「Cangoxina」という地図が登場しているのですけれども、これも私どもが提供したネタです。

お手元の資料に、この時提供した地図を紹介しております。メルカトルのアジア図です。地図はよく行くところから正確に描かれるようになります。この地図を見ると、アラビア、インドは正確に描かれていて、ヨーロッパ人たちがよく行き来していたことを示しております。フィリピンあたりに行くと、あまり訪れたことがないため、漠然と島が点在しているようにしか描かれておりません。北の方に目を転じますと、朝鮮は知られていないから書かれていない。日本はまだ場所がわかっただけですので、まだどんな形をしているかわからないため、適当に一つの島として描かれています。ただ、面白いのは、そこから南に転々と島がつづいていて、沖縄や奄美の島々の様子をよくとらえていますから、ヨーロッパ人たちが沖縄や奄美の島をつたって日本にやってきていた事実を物語っています。鉄砲伝来も、漂着という表現で、たまたま種子島だったというイメージですが、そうではなくて、南九州のどこかであったということになります。

それから、日本の部分を上からみると、「Bandu」、「Negru」、「Masacar」と日本にないような地名ばかりなのですが、南の端には「Cangoxina」（鹿児島）と書いてある。ヨーロッパに最初に知られたまちが鹿児島であり、非常に早い段階から、日本の入口にあるまちが鹿児島だと認識されていたことを示しています。これが、江戸時代、幕府が鎖国令によって、外国の窓口が長崎に限定されたため、打撃を受けてしまうのですが、鎖国令を出される前は南九州の海は外国船であふれていて、いたるところに中華街があるような状態でした。市内の「唐湊」や、県内でも「唐房」、「唐仁原」というように唐がつくような地名が残っているのは、そういった中華街の名残ということになります。

とにかく薩摩藩は外国の窓口でした。それが鎖国令で打撃を受けたわけですが、完全に断ち切られた訳ではありません。薩摩藩の場合は琉球を通じて海外の情報がどんどん入ってきており、鎖国をしていないような状況になっておりました。それを物語るのが例えば「さつまいも」です。

最初、私が鹿児島に来た時に、いろいろなことが福岡と違って驚いたのですが、分からなかった言葉の一つが「からいも」でした。鹿児島の人たちにとって、中国「唐」の国から伝わったから「からいも」で、日本の他の地域は薩摩から伝わったから「さつまいも」です。

さつまいもが鹿児島に定着したのは１７００年頃ですから、鎖国真っ只中なのです。もし鎖国の時代、長崎しか窓口がなかったとしたら長崎経由で広まって「ながさきいも」になっていたかもしれませんが、「さつまいも」として広まったということは、薩摩藩が鎖国体制から離れて、海外の窓口になっていたということを物語っています。

幕末になると、オランダの船は幕府の命に従って、薩摩藩には寄港せず、長崎に入っていましたが、イギリスやフランスの船は、薩摩を素通りしませんから、ペリーが来るずっと前から薩摩は外圧にさらされ、このままでは大変なことになるということがわかっていたため、近代化に取り組んでいきました。日本の近代化、工業化、幕末の動乱のストーリーも鹿児島

からスタートする、そういったことに制作の方々は興味を示されて、ドラマに反映したいというようなことをお話されていました。１６世紀も１９世紀もヨーロッパ人にとって、鹿児島が日本の窓口だったということをドラマの中でもご紹介するということで、その伏線として「Cangoxina」が使われているような状況になっています。ドラマではカステラも登場しましたが、江戸時代は鹿児島を代表するお菓子でした。

とにかく今、鹿児島のイメージを変えるいいチャンスであると考えています。鹿児島の歴史・文化は非常に雄大で、海外との交流が盛んで、長崎以上に外国の窓口でした。鉄砲の伝来やキリスト教などが鹿児島に初めて伝わった。これらは例外的なものではなくて、多くのものが鹿児島から全国に広まっている。先進的な歴史・文化を育んでいたということを、子どもたちや多くの人に知ってもらういいチャンスではないかと思います。大河ドラマ、明治維新１５０周年ということで、鹿児島が注目を浴びると思っているので、これを機に広めていきたいと思っております。

先ほども、方言の話が出ましたが、資料の中でザビエルのことを紹介しております。先ほどご紹介したようにヨーロッパ人にとって、早い段階で鹿児島が日本の入口ということで認識されていたため、鹿児島を目指してザビエルはやってきたわけです。たまたま鹿児島にやってきたわけではないのです。

ザビエルは２年間日本にいるのですが、一番長く滞在したのはこの鹿児島です。最初の１年間は鹿児島で暮らしています。そして日本に来て３か月目、ヨーロッパに状況報告をしており、その中で、日本のことを絶賛しています。世界中回ったが、日本人ほど素晴らしい人はいない、犯罪は少なく、身分が低い人でも読み書きができるなど、我々日本人が読むとうれしくなるようなことがたくさん書かれていますが、この書簡は鹿児島から出したものです。鹿児島以外にはどこにも行っていない段階ですので、ここに書かれている日本はイコール鹿児島のことなのです。世界中回ったザビエルの目から見て、素晴らしい人たちと映ったのは鹿児島の人たちだったということです。

また、書簡の中で「日本語が好きになりはじめ、４０日間で神の十戒を説明することができるくらいは覚えました」とザビエルは書いています。日本イコール鹿児島という状態ですから、日本語は鹿児島弁ということになりますので、ザビエルも鹿児島弁を話していた可能性が非常に高いと言えます。

ですから、鹿児島弁を教えるときに、ただ特色を教えるのではなく、このような歴史と絡めて教えていくと、子どもたちも、より身近に鹿児島のすばらしさを感じてくれるのではないかと思っています。

とにかく、今は鹿児島の人たちに、自分たちの歴史・文化のすばらしさをしっかり身に着けてもらうようなチャンスであり、これを生かしてほしいと思っています。

江戸時代の方がむしろ、自分たちの歴史文化を誇りに思っていたのではないかと思います。

例えば、西郷や大久保は、江戸や京都に行っても、自分が薩摩だということを誇りに思って胸を張って生きており、ぶれない。いろいろな地域の人々と接触して、相手のいいところを吸収してどんどん大きくなっていきました。

今の鹿児島の若者を見ていますと、皆がそうだというわけではありませんが、「何もない鹿児島」と思っていると、東京や福岡に行くと、田舎から来たということで自分たちのことを誇りに思わずに、相手のものだけを受け入れて流されてしまう。若者たちが、そのように流されないようにできればと思っております。幸い鹿児島には素晴らしい歴史文化がたくさんありますので、そういったものを生かしていっていただければと思っています。

せっかくの機会ですので、他の資料もご紹介したいと思います。

鶴丸城の写真がありますが、背後の山が、本当は城なのです。熊本城などに比べて貧弱な城と言う人もいますが、そうではなくて、シラス台地を利用した特殊な城なのです。ほかの地域では、シラス台地の絶壁がないので、わざわざ石垣を積み重ねるのですが、鹿児島の場合は、シラス台地があるのでわざわざ石垣を作る必要がない。城山展望台のところなどは８０ｍ近い絶壁ですけれども、ほかの地域はそういった絶壁がないので、石垣を作るのですが、あれが石垣だと考えてみてください。熊本城よりもはるかに難攻不落の城なのです。

城山は簡単に落ちたと言われますが、田原坂の前の熊本城の攻防は、１万の西郷軍が５，６千人の政府軍が守る熊本城を落とせなかった。城山陥落のときは３００余りの西郷軍を５万の政府軍が包囲して攻撃しています。兵隊の数がいなかったから簡単に落ちたというだけで、城自体が~~手薄~~貧弱だったというわけではありません。

また、鶴丸城は、実は築城の際に中国人の黄友賢が占ったということが「三国名勝図会」に書かれていますし、町なかでも二官橋通、三官橋通とありますが、これも中国人の名前にちなんだものと言われています。日本語で言う「太郎」、「次郎」、「三郎」の中国語版といったところです。そういったことから、鹿児島のまちづくりそのものも、中国人が建設に携わっている可能性があるのではないかと考えています。

鹿児島の一番古い地図を紹介していますが、これに描かれている海岸線は、市役所前の電車通りの位置です。山形屋の位置は波打ち際で、鹿児島銀行の本店がある位置などは海の中という状態。それが、江戸時代の半ばあたりには、今のフェリー乗り場のあたりまで埋め立てている。大規模な土木作業を平然とやってのけるのが薩摩なのです。

土木技術のレベルも全国的にかなり高いのが薩摩でした。鹿児島の町に関する本をいくつか出しているのですが、ある大学の先生が訪ねて来られ、波止場があって、大型船が波止場に横付けしている絵図などをご覧になって、この絵は本当かと尋ねられたことがあります。こういった波止場は江戸や大坂（大阪）にはなく、大坂や江戸では大型の千石船は沖合で停泊して、小型船に人・物資を積み替えて荷揚げをしていました。鹿児島の絵図を見ると大型船が横付けして荷揚げしている。これが本当だったら日本で一番港湾設備が整備されていて、近代的だったのが鹿児島になるということで訪ねて来られました。

それで水族館のところに、新波止砲台跡でもありますが、江戸時代の波止場が残っており

ますので、こういったものをご覧いただくと、たしかに千石船は横付けできると驚かれていました。他の地域よりもレベルの高い技術を持っていたようです。

資料の「鹿児島城下町割図（鹿児島県立図書館蔵）」を見ますと、左手にある川は甲突川ですが、今の甲突川ではなく、実は清滝川です。河口部に南林寺が書いてありますが、ほかの文献にも江戸時代の初期は、甲突川は南林寺の裏を流れていたと書かれています。

今、中央駅の近くを流れている甲突川は、実は江戸時代の人工の川なのです。おそらく町を広げるために作ったもので、旧甲突川である清滝川と今の甲突川の間にある地名が新屋敷なのは、まちを広げた名残ではないかと思っています。

このように、大規模な土木作業を平然とやってのけるようなところでした。外国のものは真っ先に入って来るような所でしたので、先進的で、レベルの高い文化・技術を育んでいたのではないかと考えています。

さらに、資料では、琉球館で出された献立を紹介していますが、これを見ますと、ツバメの巣やフカヒレ、豚を食べています。このころ豚は庶民も食べています。琉球を経由して、海外の食文化が入ってきており、大変豊かな食文化を育んでいました。

当時の日本人の平均身長が１５５ｃｍぐらいである中、西郷隆盛は１７８cm、大久保も１７５cm、村田新八も１８０cm、最後の藩主である島津忠義に至っては１９０cm 近くあり、大男集団でした。

明治時代もまだ日本の他の地域よりも背が高かったようで、明治時代に新潟出身の本富安四郎という人が宮之城の盈進小学校に教師として赴任して、生まれ育った新潟と鹿児島が色々と違うので、様々なことを書き残してくれているのですが、かなり最初の頃に、鹿児島の人はがっちりして背が高いと書いてあります。

日本の他の地域は、江戸時代、肉を食べませんでした。肉を食べると身が穢れるといって、肉を食べなかったため、背が低い。しかし、鹿児島では肉を食べている、いわば現代的な食文化を育んでいたので、現代人のような体格をしていた。明治時代になって、ほかの地域でもお肉を食べるようになって、背が伸びていく、鹿児島の人々は元々食べていましたから、追いつかれたというような状態なのです。

このように、非常に食文化も豊かなところでした。鹿児島はよく貧しかったといわれます。その根拠は白米を年に数回しか食べられず、さつまいもが主だったからですが、米が食べられなくても、肉を食べる豊かな食文化でした。

貧しかったというようなイメージを払しょくするいい機会と思っていますので、この機会に学校現場でも鹿児島のすばらしさをきちんと教えて、よそに行っても、薩摩、鹿児島と胸を張っていけるような子どもたちを育てていっていただけるといいかなと思っております。以上であります。

（森市長）

大変、貴重なご意見をいただきました。ありがとうございました。

それでは、松尾さんも交えて、意見交換に入りたいと思います。

まずは、教育委員の方々から、先ほど説明のありました市の取組や松尾さんから説明のありました内容等について、何かご意見やご質問があればお出しいただきたいと思います。

（髙島委員）

大変、おもしろいお話を聞かせていただきありがとうございました。それに関連しているかどうかわからないのですが、資料に、歴代島津家の当主の話がありまして、その中で私が個人的に興味を持っているのが、島津重豪です。今、大河ドラマでも斉彬が英雄的に描かれつつあるのですが、曾祖父の重豪がいなかったら、斉彬はあのようになっていなかったのではないかと思うのです。ですから、今後の話なのですが、斉彬はずいぶん全国区になってきたかなという気がするのですが、重豪も鹿児島で、そして全国的にも広めていただきたいと思っています。重豪のことも、松尾先生のように興味深い語り口で語っていただけると、また理解が深まるのではないかと思っております。

それから、教育委員会からの資料について、少しお尋ねしたいことがございます。「１学校教育における郷土の歴史や偉人等を学ぶ機会」の（２）⑤新・郷中教育推進事業の中に、放課後こども教室のことが書いてありますが、このこども教室の中身についてお聞かせください。「異年齢集団のよさを生かした学習や体験・交流活動等を行う」と書いてあるのですが、具体的に、２９年度どのようなことがなされたのかということと、２９年度４０校区ですので、約半分ぐらいでしょうか、今後、３０年度はどのように展開されるとお考えになっているのかということ、それからもう一点、（３）国内交流教育等を通じた郷土教育の関係の②「２０１７薩長維新塾キッズ」で２９年度は萩で、３０年度は鹿児島市において交流予定と書いてありますが、どの程度企画が進んでいるのかといったことを含めて教えていただきたいと思います。

（森市長）

今、髙島委員からご質問がありましたが、まず第２５代重豪について、何かご意見などございますか。

（松尾氏）

天文館を作ったお殿様でもありますので、重豪を紹介するときなどに、雑誌などでよく使われているのが、市が作っていただいた、天文館にある像があります。そういったようなものがあると、マスコミなどに取り上げていただけると思います。

天文館では暦を作っていたわけですが、その精度がとても高く、国立天文台の方が驚いておられました。日食、月食を数十分程度の誤差で予測しているほどでした。江戸や京都で作った暦よりも正確なのだそうです。

それから、突然、重豪や斉彬が出てきたわけではないということです。外国の窓口だった、そして鎖国の時代も琉球を経由して外国のものに接する機会があったため、他の地域の大名

に比べて外国の情報・文化に接する機会に、島津の殿様をはじめ、鹿児島の人たちは非常に恵まれていた、そういったところを含めて紹介したら、鹿児島の子どもたちも、自分たちに関係のある話ということで聞いてくれるのではないかと思います。

（髙島委員）

大河ドラマ「西郷どん」で、ドラマの後に、現在の鹿児島について紹介するコーナーがあるのですが、確かこの間、少し重豪のことが出ました。調所広郷が自害しますが、その非常に大きな借金を背負った薩摩藩の財政難の元が重豪で、蘭癖大名と言われていたというようなコメントだけを聞くと、重豪がお金遣いが荒かったというふうになります。調所さんも非常に苦労したし、薩摩藩も借金を背負って苦労したということは事実なのかもしれませんが、今、松尾先生がおっしゃいましたように、天文館や造士館を作るなど薩摩の文化に非常に貢献し、シーボルトと会ったときにもオランダ語で直接話をしてシーボルトも非常に驚いたと、そのときに斉彬も連れて行き、すでに英才教育をしていたというように、ある意味での功労者だと思いますので、そういった面も言っていただきたかったなという思いがあります。個人的には調所さんなどは最初はあまり知られていなかったと思いますが、今では功労者としての面がかなりクローズアップされていて、そういったところはいいと思っているのですが。

（松尾氏）

関連番組でブラタモリとか、民放でも斉彬の特番を組むそうですので、また取材がありますので、そういったところでも紹介してみたいと思います。

（森市長）

史実をしっかり伝えるチャンスだと思います。本当に皆が注目していますし、良い機会を我々は与えられておりますので、正確な情報をしっかりと発信をしていかなければいけないと思います。

では、教育委員会への質問も出ておりましたので、説明をお願いします。

（青少年課長）

新・郷中教育推進事業と薩長維新塾キッズ inHAGI についてお尋ねがございました。

まず、新・郷中教育推進事業ですが、資料にございますように、子どもたちが放課後等を安心安全に過ごす場を提供するというのが大きな趣旨でございます。放課後児童クラブは生活の場を提供するという機能が主でございますけれども、放課後こども教室の場合には、学習や体験の場を提供するという趣旨のもとに実施しているものでございます。

「新」がついておりますけれども、郷中教育という言葉を用いておりますのは、地域住民の参画を得ていること、異年齢集団の良さを生かすということが郷中教育の理念につながるということで、このようなネーミングを取っているところでございます。

今年度４０校区で開設をしておりますけれども、３１年度までに全ての校区での開設を目指して、今取り組んでいるところでございます。

それから、「薩長維新塾キッズ IN HAGI」でございますけれども、昨年、萩の方から、話がまいりまして、明治維新１５０周年を記念して、鹿児島の小学生を招待したいということでお話をいただきました。資料に両市で２８人とありますが、このうち鹿児島市からは１５人が参加いたしております。今年度は、萩の方から小学生に来ていただいて、交流ができないかということで検討を進めているところでございます。

（髙島委員）

ありがとうございました。放課後こども教室の具体的な内容を１つ、２つで結構ですので、教えていただけませんでしょうか。

（青少年課長）

内容としましては、学習をする、率直に申し上げますと宿題をする場面もございます。それから、校区の特色を生かした史跡めぐりや、正月が近づきますと、かるた作りをして、それを楽しんだりするなどの体験活動を行っているところでございます。

（森市長）

指導する人たちはどういう人たちですか。

（青少年課長）

指導にあたっているのは、それぞれの校区の地域の方々、地元の方々にお願いしているところでございます。子どもたちの人数に応じて、概ね３人とか、５人といった体制で指導していただいています。

（津曲委員）

今日は楽しくお話を聞かせていただきましてありがとうございます。

ちょうど明治維新１５０周年ということでございまして、郷土教育を見直すというか、再度ブラッシュアップするにふさわしい年ではないかと思っております。

明治１００周年の時は、私は小学校の５年生か６年生であったと思いますが、そのときも副読本が出たような気がします。それが鹿児島市だったのか、鹿児島県だったのかは定かではないのですが、そのときはインターネットもあるわけではないので、読みあさって、自分でノートに著名な人を書いて、自分なりに勉強した覚えがありまして、そういった節目のときに、郷土にフォーカスをあてた教育を深めるということは大切なのではないかと思います。

郷土教育は小学校だけでなく、中学校、高等学校とあると思うのですけれども、小学校の時は郷土教育をかなり濃く学んだ記憶があるのですが、中学、高校と行くにつれて、他の勉強が忙しくなって、あまり郷土教育というものについて触れた感覚がありません。中学、高

校になって忘れないように、継続してつなげられないかと感じるところです。もちろん、受験など、いろいろ厳しいこともあって、大学受験、例えばセンター試験には郷土教育は出てきませんから、そういう面ではあまり重要視しなくてもいいという考え方が、かつてはあったのかもしれません。

しかし、今、高大連携で、教育体系が変わってきて、物を考える、記述式の時代になってきています。そういう中で、まさしく松尾館長もおっしゃいましたけれども、郷土教育は暗記するものではなくて、心の中を揺さぶるようなものを作っていくものだとするならば、いいチャンスだと思うのです。

センター試験のマークセンスでは、郷土教育は必要ないと思いますが、君はどう思うか、何を考えるかと問われたときに、その支えになるものは何かというと、郷土での教育であったり、体験であったりというものがベースになるような気がします。

何かを記述するときにも、自分の中にぶれない芯があるから、物を考えられる。ぶれない芯というものを作ってくれたのが、例えば桜島であったり、あるいは明治維新の偉人たちであったりしますし、自分で論を展開するときの支えになるのではないかと思っております。

再度、中学校、高校での郷土教育の取組というものについて、単に見せるだけではなくて、考える教育に昇華させるようなことができればいいのではないかと思ったところです。

郷土教育というのは、おそらく愛を育む教育だと思っておりまして、なかなかそういったものはマークセンスでは出てこないわけですけれども、子どもたちが郷土に誇りを持つためには、守り育むことと、生かすことが必要でありまして、生かすというところが、中学、高校で、何かうまく郷土教育とすり合わせられないかと感じているところです。

せっかくですので、松尾先生にもお聞きしたいのですが、鹿児島においては、ありがたいことに、尚古集成館があって、西郷南洲顕彰館、維新ふるさと館、黎明館があるということで、資料というものをストックできる、特に明治維新にフォーカスを当てたような官、あるいは民の施設があるので、そういうところの研究員の方も多いのですが、もっと大学でも、郷土研究というものが広がっていけばいいと、そして次の鹿児島の郷土研究を担う人が育ってほしいと感じております。

お聞きしたいのは、そういう鹿児島の研究に対して、大学あるいは行政というものが関与できるようなヒントですとか、そういう人たちを育てていくようなことについて、もっと連携を深めたりということが、今、実際にできているのか、もし強化するとすればどんなことがあるのか、松尾先生から何かコメントがあればお聞きしたいと思います。

（松尾氏）

まず、鹿児島大学ですが、原口先生が退官された後に補充がなかったため、法文学部に近世担当者がいないという状態で、非常勤の私が担当している状態になっています。

鹿児島国際大学の方も、大田秀春先生らが頑張っていらっしゃいますけれども、純心大学の方は犬塚孝明先生が退職されたあとは近世担当の補充がないという状態です。

大学においては、国立大学は予算カット、私立大学の方も少子化問題もあって、新しい人

の採用を行いにくいような状況があって、なかなか研究者が育成されていないというのが実情です。これは鹿児島に限らず他の地域も同じような状況だと聞いております。

それから、県や市町村について、まず県の黎明館ですが、学校の先生方が入れ替わりで担当されておられます。ですので、慣れてこられたなと思った頃に、異動により出て行かれてしまいます。結局また、新しい先生が来られるわけですが、どんなに優秀な方が来られても、基本的な知識を身に着けるまでに、３年、５年かかってしまいますので、なかなか知識の継承がうまくいっていないというのが現状だと思います。

市町村でも、今問題になっているのは、指定管理者という制度です。誰でもできるような仕事は指定管理者の制度で十分だと思うのですけれども、知識の蓄積とか継続というものが求められる博物館のような研究機関は指定管理者というのはそぐわない面があります。お隣の宮崎県の方の話をお聞きとした時に、どんどん施設が指定管理者に代わり、１年とか３年とかの契約更新と聞いて驚きました。指定管理者が変わると、人も皆入れ替わってしまって、１年、２年前のことすらわからないというような状況になってきているそうですので、それが非常に問題ではないかと思います。

鹿児島の方も指定管理者が入っているところがありますけれども、そこまでひどい状況ではないかなとは思います。市町村合併もありまして、文化財とか歴史の研究を担当していた人たちが、合併後にポストがなくなってしまって、全然関係のない一般の行政職をやっているというような事例もありますので、研究者の層は残念ながら薄くなっているというのが実情であると思います。

ですから、我々としては、研究の層を厚くするには、非常に時間はかかりますが、研究者の育成ということについても力を注いでいただけるとありがたいと思います。

研究成果というものはすぐには出ません。でも積み重ねていると大きな成果になります。例えば、世界遺産なども私が関わったのですが、世界遺産に関しては外国の方々が熱心でした。G7 の中になぜ日本だけがヨーロッパ系以外の国々の中で入るのかということで興味を持たれて、日本の近代化は鹿児島から始まっているということで来られたことがあります。それで説明をしたのですが、他の国々もヨーロッパの国々から植民地化されたくないために近代化に取り組んでいるのですけれども、日本以外は皆失敗しています。それらの国々が採った方法というと、必要なものはヨーロッパから輸入しているのです。ですから、いつまでたってもヨーロッパの技術が身につかない。日本の場合は、薩摩藩が近代化に取り組んだのはペリーが来る前の鎖国体制の時です。ですから、ヨーロッパから輸入できないため、見たことのないものをオランダ語の本を参考に造るという非常に変わった方法を取っています。説明で「オランダの本を参考に反射炉を造りました」といったら、外国の研究者からは、「そんなことができるはずがない、嘘だ」と言われました。ですが、我々も研究していましたから、例えば反射炉を造るのに耐火レンガが必要なのですが、１４００度に耐える耐火レンガは薩摩焼で、いろいろな機械は、からくり職人が動員されて造っており、出来上がったものはヨーロッパと同じような形になりますが、造っている過程の技術は日本のものなのです。日本のものにどんどん置き換えていっている。非常に苦労する方法ですが、でも苦労するか

らこそ成功したのです。

例えば、蒸気機関を日本で最初に造ったのは、鹿児島の人たちであり、後にオランダ人たちが見てびっくりしています。本物を見たことがない人々が造っているので、１２馬力のエンジンなのですが、蒸気漏れなどがひどくて２馬力しか出ていないが、動いている。これを造った人たちはすごいと。

そのような経験がありますから、鹿児島の技術者は、例えば蒸気機関でいうと、部品の一つ一つに至るまで、どういう役割を果たしているか、なぜこういう形になっているのか、きちんと理解している。ですから、やがて開国して、蒸気機関を輸入することができるようになったときにその時の経験が活きて、自分たちで使いこなす、簡単な修理や改良だったら自分たちでしてしまう。そういった苦労の積み重ねが、今の技術立国につながっている。鹿児島の近代化遺産は、見た目はパッとしないものが多いかもしれませんが、日本だけが１９世紀に近代化に成功して、先進国の仲間入りした答えがあるということで、非常に重視されています。

研究が進んでいたから世界遺産にできた。研究というものは、最初、研究を始めた時には役に立っていないかもしれませんが、やがて注目を浴びるというようなこともありますので、研究体制の充実というのは、非常に重要と思います。

（津曲委員）

ありがとうございます。小学校で育んだものが、中学、高校とずっと継承して、大学でもっと学ぶとか、郷土から研究家が出てくる仕組みづくりも大切ではないかと思いました。

（森市長）

研究する方々は、それぞれの分野で情熱を持って取り組まれ、それを継承していかなければいけないという思いもしっかりと持っておられますので、制度が変わり指定管理者制度が入って、管理運営はそういう方法でいいかもしれませんが、研究とかそういうものについては、専門的な方々がしっかりとそれを引き継いでいき、またそれを多くの方々に教えていただく、そういう人材を育てていくことは大切だと思います。

（桃木野委員）

松尾館長さん、本当にいいお話をありがとうございました。本当に今日は感銘を受けているところであります。

私も、鹿児島は辺境の地だと、今の今まで思っていて、やはり東京に行かないとだめだという考えが根底にあったのですけれども、鹿児島は先進的な文化が１６世紀から１９世紀にかけて既に育まれていた、その名残として中華街があったのが地名に残っているとか、大型船が接岸できる先端的な土木技術があったということを知ることができました。ですが、今、鹿児島にいて、そういうことに触れる機会があまりないのではないかと思います。鹿児島のまちを歩いても、あまり異文化の薫りがしないのではないかと思うのです。

先ほど、鹿児島では豚肉などを食べていて、非常に食文化が豊かだったと、西郷さんも１７８cm もあったというお話でしたが、高見馬場交差点や鍛冶屋町の交差点に武士の像が置いてあり、あれは１４０ｃｍとか１５０ｃｍぐらいです。どうせなら１９０ｃｍぐらいの武士の像を置いて、鹿児島というのはこんなに食文化が豊かで、そして蒸気機関のお話もそうですけれども、鹿児島から、いろいろな文化や技術を発信していったということを、まちにいながら触れられるようにできたらいいのではないかと思います。

そして、子どもたちにも、松尾館長さんのようなお話をもっと聞いてもらい、鹿児島に誇りを持ってもらえるようにしてほしいと思います。

また、マンガ教材として「徳の交わり」がありますが、西郷さんを含め、武士の話はよくあると思うのですが、華の都・鹿児島の文化あふれる話を広げてもらえるように、これは教育委員会の方になりますが、お願いしたいと思います。

（森市長）

立元委員は何かございませんか。

（立元委員）

質問などはないのですが、感想だけ述べさせていただきます。

私自身が歴史に興味を持ち始めたのがここ数年なので、今日の松尾館長のお話は大変興味深かったですし、もともと郷土愛は強い方だという自負はあるのですが、鹿児島出身であるということを、とても誇りに思える内容だったなと本当に感銘を受けました。

よく日本人が世界に対したときに、自尊心であったり、自己肯定感が低いとよく言われますが、そういうものが郷土教育を通じて、養われる可能性もあるのではないかと考えました。

郷土教育を通じて、そういうものが培われるのであれば、本当にいい手段、学問になるのかなという可能性を感じましたので、是非、小さいころから、そういう話を広げることが必要だと感じました。

（森市長）

教育長は何かありますか。

（教育長）

いままでのお話をしっかりと受け止めて取り組んでまいります。

（市長）

今、市でも、それぞれの自治体でも、郷土に対する思いや愛情を育み、郷土で生まれ、育ち、できれば、郷土に就職してほしいという思いを持っております。

少子高齢化が大きな課題であり、それに向けていろいろな対策を打っておりますけれども、今、お話がありましたように、鹿児島は素晴らしい歴史もあり、文化もあり、そしてお話の

ありました土木技術などを含めまして、そういった日本の最先端の地域であったということを知らない若い人たちが多いと思います。

桃木野委員がおっしゃったように、鹿児島が、辺境の地ではなくて最先端の地であったということで、これをもう少し、我々行政も、いろいろな方々と一緒になって情報発信をしなければいけないと思いました。そのことが、若者が鹿児島に定着をする一つの大きなきっかけになるのではないかと思います。

大変ありがたいお話をお聞かせいただき、心から感謝申しあげます。ありがとうございました。

他にございませんか。

（髙島委員）

鹿児島の歴史というのは、学べば学ぶほど面白くて、個人的にも大好きなんですが、誰でもが毎日のように関連のある文化の１アプローチとして「食」があります。

先ほど、松尾館長さんから西郷さんの体格のお話がありましたが、鹿児島の食文化についても、歴史上の偉人の業績や歴史的な人物と絡めて、これは教育委員会のことになると思いますが、小学校、中学校、高校を通して、そして一般の生涯学習などにおいても、例えば、当時西郷さん達はどんなものを食べていたのかとか、薩摩藩の「食」が他の藩とどのように違っていたのか、また、お話のあった、さつまいもの話であるとか、実際の調理実習的な体験も含めて、何か、そういう食に関するアプローチもいろいろな部局で進めていっていただければありがたいと思います。

この間も、県と連携して、本学の食物栄養学専攻の千葉講師が短大生・大学生に調理実習を行ったという新聞記事が出ました。明治維新１５０周年記念ということで、「かごしま食文化検定」というものを学生が作成しました。もちろん教員が指導しているのですが、なぞなぞ形式で２種類を学生が作りまして、私もやってみましたが満点には程遠かったということで、勉強しなければいけないなと思ったところです。例えば、「西郷さんの得意な台所仕事は何だったのでしょう」とか、「大久保さんは紅茶が好きだったらしいのですが、中に何を入れていたのでしょう」など、３択クイズで非常におもしろい内容になっています。これは一つの例なのですが、こういった「食」についてのアプローチというのも同時にいろいろな形で進めていただければ、おもしろいのではないかと思います。

明治１５０周年を記念して、当時の食べ物について、そしてまた、「食」は今や鹿児島の非常に盛んな産業ですので、そういったところに他県の人たちの目をひきつけることにもつながりますので、是非、「食」のことも入れていただければと思います。以上です。

（津曲委員）

今年度はこれで最後だと思いますけれども、こういう総合教育会議という場で、我々教育委員が、直に市長と同じテーブルでお話できるということを大変うれしく思っております。

感謝申し上げます。

我々は毎月１回、さまざまな教育の問題について議論をして、いじめの問題があったり、教育課程の問題とかあったりするのですが、一方では、市長がおっしゃったように１８歳人口をどうやって留めて、鹿児島の活力を作っていくかというようなことも重要でありまして、これは同根の、同じ輪にあるものであるように感じております。

市長がおっしゃるように、郷土教育、鹿児島に愛着を持つ子どもたちを育てるということと、いじめの問題とか、さまざまな問題というものを一緒に語りながら、それを前提にしながら鹿児島の教育を作っていくということが必要だとするならば、この会議の意義というのは、すごく私はありがたいと思っております。

来年度以降も、こういった機会を是非、前期、後期１回ずつぐらい設けていただければと思います。

（森市長）

ありがとうございました。

皆さんから大変貴重なご意見をいただきました。また、松尾館長さんから、鹿児島の歴史・文化・食などについて、新たな観点から教えていただきました。心から感謝申し上げます。

本日いただきましたご意見は、市長事務部局と教育委員会の双方で事業実施にあたっての参考にさせていただきたいと思います。

松尾館長さんには大変お忙しい中、お越しいただきまして心から感謝申し上げます。また教育委員の皆様にもご出席いただきましてありがとうございました。

また、今、津曲委員からお話がありましたように、教育委員会と行政が一体となって、連携してさまざまな取組をしっかりと進めていかなければいけないと思っております。この総合教育会議を、来年度も引き続き実施をしていきたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

それでは、これで総合教育会議は終了いたします。これからの進行を事務局にお返しします。

３．閉会

（政策企画課主幹）

長時間にわたり、ご協議いただきましてありがとうございました。

以上をもちまして、平成２９年度鹿児島市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。

【以上】